

日本独文学会機関誌執筆要領（新）

（2016.1.30.の日本独文学会理事会で承認された新編集方針に基づき 2016 年度から適用）

機関誌は定期刊行物であるため、編集期間はかなり限定されています。また刊行には多額の費用がかかり、その大半は組版代で占められます。無用の出費を避け、編集作業を円滑に進行させて、誤植のない学会誌を刊行するためには、執筆者各位に多大なご協力を仰がなければなりません。

この点をご理解のうえ、かならず以下の執筆要領をお守りください。

機関誌としての統一の必要上、送り仮名・漢字仮名づかいその他、編集委員会で原稿に手を入れさせていただく場合がございます。ご了承ください。

なお原稿はかならず決定稿をご送付願います。初校は執筆者の方々にご覧いただきますが、校正段階では誤植訂正以外の加筆はできません。

出版社との原稿や校正のやりとりは、すべてパソコンを用いて行われています。パソコンをお使いでない方は、業者などにパソコン入力をご依頼ください。パソコンは Windows でも Macintosh でもかまいませんが、郵便でデータを送る場合は、CD または USB メモリに、氏名、原稿のタイトルおよびお使いになったパソコンの OS（Windows か Macintosh か）とソフト名（ワープロソフトの Word、和文の場合には一太郎 Ver. 10 以上も可、欧文誌の場合は不可）を明記したラベルを貼付してください。電子メールによる送付の場合も、メールフォームの「メッセージ欄」に上記の点を明記してください。

I. 原稿本文について

1) 日本文の場合

- a. 原稿 1 枚目は、本文を書きだす前に 5 行の余白をとり、そこに論文表題を記す。ブラインド審査のため、執筆者氏名は省くこと。また本文中でも執筆者の特定につながる表現は避けること。
- b. 段落の書きだしは、1 字下げる。
- c. 句読点（コンマ「、」、白ぬきマル「。」）その他の記号は、全角扱いとする。ただし行頭には句読点を置かず、前行末にはみ出して打つ。この場合、そこで改行するのではないかぎり、次行の冒頭は 1 字下げにしない。
- d. 作品名・論文題名・雑誌名などの表題には原則として『　』を、引用文には「　」を用いる。引用文中に引用が含まれる場合などには、『　』の代用として《　》を、「　」の代用として〈　〉を用いる。
- e. ダッシュ（—）とハイフン（-）の区別、等号（=）と二重ハイフン（=）の区別をそれぞれ明確にする。また数種類のダッシュ（二倍、全角、二分）などを使いわける場合にはその都度、プリントアウトした原稿に赤字で指示する。
- f. 用字・用語は、原則として新漢字・新仮名づかいを用いる。現在使われていない文字や表現は避けること。
- g. ドイツ文によるレジュメについては、次項 2) を全文、適用する。

2) 欧文の場合

- a. 原稿 1 枚目は、本文を書きだす前に 5 行の余白をとり、そこに論文表題を記す。プラインド審査のため、執筆者氏名は省くこと。また本文中でも執筆者の特定につながる表現は避けること。
- b. 原稿はあらかじめ、しかるべきネイティヴ・スピーカーに目を通してもらうこと。
- c. 上下左右の余白を 2 cm とる。
- d. 新正書法、旧正書法のどちらでもかまわないが、どちらかに統一すること。
- e. 引用符号“ ”は、印刷に際しては、“ ”となる。
- f. ダッシュ (—) とハイフン (-) の区別を明確にする。また数種類のダッシュ (二倍、全角、二分など) を使いわける場合には、そのつど赤字で指示する。

II. 注について

- 1) 注は Word の脚注機能を使うことが望ましいが、それが無理な場合には、注には通し番号を付し、本文の該当箇所にはアラビア数字をつける。注が文全体にかかる場合、句読点などの後に注番号を付する。

例： . . . ¹ . . . 。 ² . . . , ³ (KS 1, 25). ⁴

- 2) 注で出典・参照文献などを指示するときには、原則として以下の例にしたがう。

a. 全集・作品集などを指示する場合

例：

- 1) 作品からの引用は Heinrich von Kleist: *Sämtliche Werke und Briefe*. Hrsg. von Helmut Sembdner. 6. Aufl. München (Hanser) 1977, 2. Band に拠る。以下、同書からの引用は本文中に頁数のみを示す。
- 2) Vgl. Richard Wagner: *Dichtungen und Schriften*. Jubiläumsausgabe in 10 Bänden. Hrsg. von Dieter Borchmeyer. Frankfurt a. M. (Insel) 1983 [以下、JA と略記] , Bd. 5, S. 176f.
- 3) 芦津丈夫他訳：ゲーテ全集第 13 卷（潮出版社）1980, 122-126 頁所収。

b. 文献が単行本の場合

例：

- 4) エーゴン・フリーデル（宮下啓三訳）：近代文化史 2（みすず書房）1987, 360 頁。
- 5) 川越修：ベルリン王都の近代（ミネルヴァ書房）1988, 165-176 頁参照。
- 6) Christa Wolf: *Sommerstück*. Berlin u. Weimar (Aufbau) 1989, S. 171.
- 7) Vgl. André Jolles: *Einfache Formen*. 5. Aufl. Tübingen (Niemeyer) 1974, S. 217ff.

c. 論文集・雑誌・新聞などに収録されている文献を指示する場合

例：

- 8) 川中子義勝：ハーマンと旧約聖書——『ゴルゴタとシェブリミニ』 [『ドイツ文学』第87号, 1991, 12-22頁] 14頁。
- 9) 松下 亮：ハイネとベルネ——伝記的にみた両者の交渉前史 [九州大学独立文学研究会『独仏文学研究』第24号, 1974, 69-86頁] 参照。
- 10) Frank Möbus: Des Plutus zwiefache Rede. Eine kritische Bibelanspielung in Mummenschanz des Faust II. In: Zeitschrift für deutsche Philologie, 107. Band (1988) Sonderheft, S. 71-84, hier S. 78f.
- 11) Vgl. dazu Reinhart Meyer: Das Nationaltheater in Deutschland als höfisches Institut: Versuch einer Begriffs- und Funktionsbestimmung. In: Das Ende des Stegreifspiels – Die Geburt des Nationaltheaters. Hrsg. von Roger Bauer u. Jürgen Wertheimer. München (Fink) 1983, S. 124-152, besonders S. 149, Anm. 26.
- 12) Ursula Bode: Maler und Dichter der Idylle. In Wolfenbüttel wird Gessners Werk ausgestellt. In: Süddeutsche Zeitung (5. 9. 1980), S. 37.

d. 語学論文の場合

例：

- 13) Henne (1986: 137) この場合には論文末に文献リストを付け, 次のように記すこと。Henne, Helmut (1986): Jugend und ihre Sprache. Berlin/New York, de Gruyter.

e. その他, 注の記載方法は, 一般に認められている方法に準拠すること。